

東大寺善財童子絵巻について

美術工芸研究室

東大寺絵画調査は、9月8日よりはじめて調査回数はすでに23回を数え、これまで約100件の調査を行ない、それは全体の約6割に当っている。なお東大寺絵画は先に南都仏教絵画の研究の一環として、昭和46年3月当研究室が「東大寺絵画調査目録」を作成し、一通りのリストアップが完了している。それに沿って詳細な調査を行ない各作品の調書を作成し、東大寺に残る絵画の全貌を明らかにしようとするものである。

これまで調査を行なった作品のうち、今回ここに紹介する「善財童子絵巻」1巻は、国宝に指定されている東大寺蔵善財童子絵巻（奈良国立博物館寄託、以下国宝本）及び、巷間に流出したその断簡を含めたものの模写本である。断簡として切断される以前の全段そろっていたもとの姿を伝える点で貴重な資料といえる。

原本に当る善財童子絵巻は別名華厳五十五所絵巻とも呼ばれ、華厳經入法界品に基づいており、画中の色紙形に書かれた讃文は北宋楊傑の「入法界品讃」から採用している。善財童子は文殊菩薩の勧めに従い54人の善知識を訪ね、最後に普賢菩薩の下で大乗の行願を得るというものである。全段55段に各善知識を歴訪する善財童子が描かれている。爽やかな淡彩の彩色と軽やかな筆致による清純で親しみやすい画面がくり展げられ、その不思議な魅力で多くの人に感銘を与えていている。そのうち東大寺国宝本は、途中第22段から第31段までを欠き、又巻末の第48段から第55段までを失っている。すなわちこの部分は断簡として諸家に分蔵され、第22段から第31段までは藤田美術館、第48段、49段は上野家、第50段から第53段は友田家、第54、55段は東京国立博物館にある。

この模写本は紙本淡彩で、縦29.7cm、横26～27cmの料紙72紙を継いだ一巻の巻子本である。原本と同大であるが、紙の横巾が原本に比べ小さく、紙継は異なる箇所に当っている。全段55段を完備しており、原本と同様各段の区切りはなく、色紙形中の讃文を伴った各場面が順次描かれる。巻頭第1紙右下隅に朱印を有する以外に落款・印章はない。模写された時期は後述する状況から明治20年頃と推定される。淡墨の輪郭線はなかなか巧みな線で原本を忠実に写し取り、しかも筆に勢があって模写の際にしばしば見られる筆の渋滞は少ない。賦彩も原本のもつ明度の高い淡彩の美しさをよく伝えている。朱・丹・白群などは原本の色調に合せ、ことに衣の襞の隈取りなども正しく表わしている。明るい線を施し、且つ原本に見られる顔料の剥落した緑青焼けの状態もよく表わして、原本のもつ爽やかな色彩を写そうとしたことがわかる。又黄色は原本では恐らく下に白

善財童子画像

東大寺善財童子絵巻について

色顔料を塗り、上から有機質の藤黄をかけたもので、現在はやや黄かっ色を帶びているが、模写本ではその変色した色をよく現わしている。色紙形には原本と同じ讃文を書込んでいるが、原本の持つはみ出すばかりの力強い書体ではない。原本を忠実に且つ的確に伝えたこの模本の筆者は明らかではないが、この模本とほぼ同じ頃にいくつかの絵巻のすぐれた模写がつくられたようで、時々巷間に散見することがある。

この模本によっていくつかの事実が確認できる。まず国宝本では第一段文殊菩薩指南の段から始まっているが、楊傑の讃頌では冒頭に毗盧遮那如來讃があり、それに対応する絵が最初にあったかとも考えられていたが、模写は国宝本と同様であり、当初から毗盧遮那如來の段は描かれてなかったと解される。更に国宝本の第21段は、それに続く第22段から第31段までが藤田美術館に流出したため、第32段と直接継ながっているが、その継目を細工するため、第32段の善財童子の部分を切り取り、第21段の末に貼布している。そのような断簡切断時の改変がこの模本によって確認される。

国宝本については從来より東大寺における伝来など一切明らかならず、明治の碩学黒川真頬をして「此絵巻ノミ独リ世ニ埋没シテアリシハ不審ナリ」（国華176号明治38年1月　ただし執筆は明治24年）と嘆せしめたほどである。そしてその後何時如何なる事情で断簡として先述の部分が流出したかも明らかではなかったが、この模本によってその一端を知ることができる。龜田孜氏によって「ただ明治20年頃に模写の為に寺外に搬出され、その完全な模本と入れ箱が幸に還納されたことが知られている」（清閑180号昭和18年11月）と伝えられ、この模本がそれに当たると解される。しかもこの時断簡が切断されたことを示唆しており、模写はそれを前提として行なわれたのであろう。諸家に離散する悲しむべき運命を前にこの模本が作られたといえよう。以上善財童子絵巻の模本の紹介と確認された問題点を略述した。

この他東大寺には善財童子関係のもので、絹本著色善財童子図1幅がある。合掌して腰をかがめた、善知識を歴訪する時の善財童子の姿を描いた単独像である。善財童子は54人の善知識を歴訪する図や、その一場面である補陀落山に觀音菩薩と対座する図としても描かれ、又渡海文殊を先導する童子としても表わされる。しかし本図の如き単独像の遺例は極めてまれである。文献上では三宝絵詞にいう法華寺花嚴会の造像が著名である。また明惠の影響によって東大寺で善知識供が行なわれたことが知られており、凝然の所述書目中に善財童子講式一巻が見えている。又後世の記録ではあるが東大寺年中行事記享保11年寺宝展観目録中に善財童子の木像が記録されている。本図もそのような善知識供に用いられたものであろうか。くせの強い描線と暗寒色を主とする重厚な彩色であり、又着衣には金泥によって唐草文、团花纹などが施され、かの絵巻に描かれた童子とは対称的な作風を示している。むしろ高麗画とされる楊柳觀音図に描かれた善財童子の像容や表現が本図と相通するところがある。よって表現上の特色や高麗仏画との関係を考えても本図の製作は南北朝時代を遡りえないと思われる。なお本調査には大和文華館林進氏の協力を得ている。

（百橋 明穂）